



不世出の指導者, 長倉三郎先生のご逝去を悼む

Ryoji NOYORI 野依良治 日本学士院会員, 日本化学会元会長

多くの人々が敬慕する長倉三郎先生は、2020年4月に天寿を全うされ、99年にわたる生涯を閉じられました。文化勲章、勲一等瑞宝章受章、我が国を代表する化学者であるとともに、学術行政における稀有の牽引者でした。心から哀悼の意を表したく存じます。

私自身は日本化学会、文部省学術審議会、日本学士院などで、先生の自らを律する凜としたお姿にたびたび接する機会を得て、多くを学ばせていただきました。

先生のご専門分野は物理化学とされますが、「分子は構成原子の集合体」という要素還元的な視点を排し、分子軌道論的理論体系の下で化学研究を進められました。ご講演ではシカゴ大学時代の指導者 Robert S. Mulliken 教授（1966年ノーベル化学賞受賞者）の「分子は分子である（A molecule is a molecule）」との言葉をしばしば引用されました。1970年代後半には、有機化学者たちの関心事であった短寿命活性種の化学反応機構にも興味をもたれ、合宿形式の研究集会に参加され、独自の電荷移動論に基づく見解を述べられていました。

化学分野で顕著な学術業績を残されたのち、先生は科学と社会の関係に強い関心を寄せられます。近年、精神文化的活動の基盤としての科学の役割の軽視によって、社会が精神の荒廃を招いていることを憂慮されたことです。1997年頃、文部省研究費で「科学と社会」フィージビリティスタディを指揮されましたが、完全主義者である先生は、その後も故緑子夫人によれば、連日連夜、膨大な資料の読破に没頭されたとのこ

とです。渾身のご研鑽と思索は2011年、御年90歳で名著『「複眼的思考」ノススメ』の出版に結実しました。深遠な思想はここに「世界は調和の文明に移るべし」と説いています。

学術の自律性を特に尊重される方でした。1980年半ば、ある研究集会後の夕食会で突如「文部省が大学における研究を評価しようとしているが、皆さんどう思うか」と気色ばんで問われて驚きました。当時、教員人事や褒賞などに関わる評価は、学問的専門性ゆえにほぼ学界の価値観、自主性に委ねられていましたが、なぜか行政が関与し始めるという。のちの学術界の自治の衰退を予見されていたのでしょうか。

先生は日本人初の国際純正・応用化学連合(IUPAC)会長就任など豊かな国際的経験に裏打ちされた普遍的な研究、教育観をもたれ、強い使命感をもって文部省の学術施策に関与されました。既成の大学制度を超えて教育研究のあるべき姿の実現に手腕を発揮され、自ら分子科学研究所、総合研究大学院大学を発案し、創設へと導かれました。

長倉先生は、まさに知の巨人、日本の化学界が生んだ不世出の Scientist and Statesman（第一次世界大戦中の困難から米国の有機化学界を再生し、興隆に導いた手腕家 Roger Adams の評伝の表題）でした。長年にわたる比類ない社会へのご貢献に深い敬意と感謝を表しつつ、ご冥福をお祈り申し上げます。

© 2021 The Chemical Society of Japan



40歳にて松永賞を受け祝福される(1978年)



それから20年後、名古屋大学理学研究科長として「物質科学国際研究センター」創設記念の講演をお願ひした(1998年)